

令和 5 年 6 月 25 日現在

機関番号：22701

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K13560

研究課題名（和文）制度ロジック変革モデルの探求：東京起業エコシステムの形成プロセス研究

研究課題名（英文）Exploring Institutional Logic Transformation Model: Formation Process of Tokyo Entrepreneurial Ecosystem

研究代表者

芦澤 美智子 (Ashizawa, Michiko)

横浜市立大学・国際商学部・准教授

研究者番号：30715404

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、制度的環境の強い地域で組織フィールドがどのように形成されるかの解明を試みた。主な研究対象は、2013年頃から形成が見られる東京起業エコシステム（東京EE）である。研究1年目には、東京EEのSaaSセクターのベンチャーキャピタリストA氏からFacebookデータの提供を受けて分析を行った。研究2年目には、起業エコシステムの主要アクターであるアクセラレーター、ピッチコンテストに焦点をあて、それぞれの東京EEへの影響について検証しようと試みた。研究3年目のうち8か月間は、スタンフォード大学に客員研究員として滞在する機会を得て、スタンフォード大学中心の起業エコシステムについて調査研究した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は2013年頃から急速に発展した「東京起業エコシステム」の形成期に、主要アクターであるベンチャーキャピタリストがどのように出現し、影響を及ぼすポジションを獲得するに至るのかについての解明したものである。また、重要なアクターであるアクセラレーターとピッチコンテストの効果について検証したものである。この研究は、制度的環境の強い国でどのように起業エコシステムが形成されるかに対する理論的理解を深めるとともに、現在日本各地で進んでいる起業エコシステム形成に実践的示唆を与える研究になりつと考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify how organizational fields are formed in areas with strong institutional environments. The main target is the Tokyo entrepreneurial ecosystem (Tokyo EE), which has been forming since around 2013.

In the first year of the study, I analyzed Facebook data provided by Mr. A, a venture capitalist in the SaaS sector of Tokyo EE. In the second year of the study, I focused on the key actors in the entrepreneurial ecosystem, i.e., accelerators and pitch contests. I attempted to examine their respective impacts on Tokyo EE. During the third year of my research, I had the opportunity to spend eight months as a visiting scholar at Stanford University, where I investigated the entrepreneurial ecosystem at Stanford University and conducted a comparative study with Tokyo EE.

研究分野：アントレプレナーシップ

キーワード：起業エコシステム ベンチャーキャピタル アクセラレーター ピッチコンテスト 新制度理論

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 制度的組織論研究発展の可能性：制度的企業家の研究は、同様顧客・同様サービスや機能を提供する同質性を有した組織群での研究が多く見られた (DiMaggio, 1988; Greenwood et al., 2002; 松嶋&高橋, 2009)。しかしながら、東京 EE のように地域の既存産業全体に幅広く関係し影響する組織群を対象とする研究は十分ではなかった。従って、周辺の産業を広範に巻き込みながら新しい組織フィールドが形成され発展していく過程を明らかにする研究として、本研究は制度的組織論を発展させる可能性があると考えた。

(2)アントレプレナーシップ研究発展の可能性：急成長するスタートアップがシリコンバレーや北京のような特定都市に集中する現象が見られ、こうした特定都市がスタートアップを生み出す仕組みが「起業エコシステム(EE)」として注目されている。日本では2013年頃から第4次ベンチャーブームが興り「東京 EE」が形成されてきた。EEの形成で先行した米国や中国は起業家精神が旺盛な社会である。一方、日本は起業活動に対して否定的な価値観が強い (Global Entrepreneurship Monitor, 2015; 2018)。このような背景を持つ国でEEがどのように形成され発展していくのかに関する研究は多くなかった。従って、東京 EE 形成に関する研究は、アントレプレナーシップ研究において貢献の可能性が高いと考えた。

2. 研究の目的

(1) アントレプレナーシップ研究において、起業活動に対して否定的な価値観が強い地域における、民間部門主体での創発的活動および、東京 EE の形成プロセス、東京 EE における重要アクターの効果を明らかにする。ここで対象とする重要なアクターとは、東京 EE 研究 (Watanabe & Ashizawa, 2019) によって抽出された、ベンチャーキャピタリスト、アクセラレーター、ピッチコンテストである。

(2) 制度的企業家が新しい組織フィールドを生み出す時の、多様なアクターの制度ロジックの調整/変革プロセスについてのモデルを見出すことを目的とする。東京 EE の形成においては、産学官大学等を含む、広範な主体が関わる。特に、政府自治体や大学、大企業といった正当性ある主体を巻き込み、新しい産業の創造(時には既存産業の破壊を含む)に意欲を持つ起業家の支援を行うための、制度ロジック形成は困難をきたすことが予想されるが、その解明が研究の目的に含まれる。

3. 研究の方法

(1)ベンチャーキャピタリスト研究：本研究は東京 EE の形成プロセスや制度ロジックの調整/変革プロセスの解明を目的とするが、理論構築の探索でもあり、個別事例の精緻な観察が可能となる、単一事例の方法 (Yin, 2009) を採用した。事例研究の対象は、東京 EE において、SaaS (Software as a Service) 分野での投資額でトップクラスのベンチャーキャピタリスト A 氏である。また、データ収集方法は 提供された facebook データ (2019 年 10 月時点で約 2,500 名のネットワーク) 半構造化インタビュー、ウェブ等に公開された二次データの複数ルートで実施され、三角測量的手法を用いた。

(2) ピッチコンテストの効果研究：日本の 4 大ピッチコンテスト (ICC, TechCrunch, B Dash, IVS の 4 つ) の入賞が、その後の資金調達に正の影響を及ぼすことを検証しようとした。研究の対象は、2016 年から 2019 年までの期間に開催された日本の 4 大ピッチコンテスト (合計 27 回) のファイナル審査時の登壇企業 (ファイナリスト) のうち、定量分析において含めるべきでないと判断されたものを除く、223 社であり、それらを分析対象として重回帰分析を行った。なお、スタートアップに関するデータは「INITIAL」のウェブサイトを通じて収集した。

(3) アクセラレーターの効果研究：2010 年度から 2019 年度の間にはアクセラレーター 38 社が開催したアクセラレーター・プログラムに参加したスタートアップ 813 社を対象に分析を実施した。アクセラレーター 38 社は、「国内アクセラレーターカオスマップ 2020 年版」(Code Republic 社)「2019 年度アクセラレーター・プログラム 122 選」(eiicon company 社)および「INITIAL」(ユーザベース社)の 3 つのデータベースに掲載される、日本の主要なアクセラレーターである。また、スタートアップに関するデータは「INITIAL」、アクセラレーターおよびスタートアップのウェブサイトを通じて収集した。スタートアップを分析単位とする本分析では、各スタートアップの観察値はいずれかのアクセラレーターに属しているので、入れ子構造 (nested structure) となっている。そのため推計手法として、階層的線形モデル (HLM) を利用した。

4. 研究成果

(1)ベンチャーキャピタリスト研究：A 氏が制度的企業家として東京 EE 全体へ影響力を及ぼすほ

どのポジションにあったかは明らかにならず、制度的企業家としての行動（制度ロジック調整/変革）の理論貢献には至らなかった。しかしながら、起業エコシステムにとって重要なアクターであるベンチャーキャピタル（VC）の中には、活動当初は資金・人材ネットワーク・知識情報がなく、スタートアップ支援が十分に行いえない者も少なくない。特に、ベンチャーキャピタリストは多様な資源を提供する、起業エコシステムにとって欠かせない重要なアクターだが（Timmons & Bygrave, 1986; Fried & Hisrich, 1995; Wright & Robbie, 1998）、これらのVCがどうやって出現し、どうやって必要資源を獲得するかを解明することは、これから起業エコシステムを形成しようとする地域にとって有用な知識となりうる。この観点から、A氏がいかに東京EEにおいて卓越したベンチャーキャピタリストになったかに焦点を絞って研究を実施した。

一次データ（Facebookの友達データ、インタビューデータ）と二次データ分析を行った結果、A氏が卓越したベンチャーキャピタリストになるにあたって重要な点は以下であった。それは、彼のキャリアの初期において、米国ビジネススクールとシリコンバレーの経験が大きかったこと。日本の未来を予測し、当初は大企業中心のネットワーク行動をしたこと。キャリア形成期においては、米国最先端の知識獲得・発信を重視し、日本のビジネス慣行に適応させた実践知への翻訳を積極的に担っていた。このことが、A氏本人のポジション獲得に繋がり、また、東京EEの発展に寄与したと考えられる。この頃はエコシステムの支援アクターとのネットワークキングが活発になされていることも発見された。キャリア確立期においては、起業家へのコミットメントに大きくシフトし、ネットワークキング行動も起業家に集中していた。このことで、A氏が東京EEの継続的な発展に寄与した。このように、起業エコシステムの形成発展には、A氏のようなベンチャーキャピタリストの存在が影響していることが示唆された。

この研究は、起業活動に対して否定的な価値観が強い地域（日本）におけるEEの形成プロセス解明において、貢献あるものとなり、また、今後日本の地域で起業エコシステム形成を議論するにあたって、実務的に有用な研究になったものと言える。

(2) ピッチコンテストの効果：日本の4大ピッチコンテストの優勝がきっかけで躍進したと語る起業家も多いが、これまでに効果を統計的に実証した研究は見られなかった。本研究によって、日本の4大ピッチコンテストの効果が実証され、日本の起業エコシステムにおいて、ピッチコンテストが重要な役割を果たしていることが確認できた。また本研究によって、優勝・準優勝といった華やかな最上位の勝利を得なくとも、「入賞」の形で評価されることで、その後の資金調達に繋がるということが明らかになった。このことはまた、ピッチコンテスト運営者にとっては、ごく少数の入賞者を選び抜くことを重視するのではなく、比較的幅広く入賞企業を選ぶこと、それら入賞企業のシグナル発信の手助けをすることがより重要であることが示唆される結果となった。

(3) アクセラレーターの効果：2000年代に米国で生まれ、スタートアップを多面的に支援するアクセラレーターは、2010年代に日本にも登場した。アクセラレーターに対する実務的な関心の高まりを受けて、近年、このテーマに関する学術研究が蓄積されつつあるが、先行研究では、アクセラレーターがスタートアップの成長をどのように支援し、スタートアップの業績にどのような影響を与えるかについて、一貫した結果を見出すことができていない。この矛盾は、アクセラレーターの異なる特性がスタートアップに異なる影響を与えている可能性を示唆している。本研究では、そのような特性の一つとしてアクセラレーターの経験に注目し、スタートアップの成長におけるその役割を検証した。具体的には、日本国内の38のアクセラレーターのデータを用いた実証分析を通じて、アクセラレーターの経験が、アクセラレーター・プログラムに参加したスタートアップのデモデイ終了後の1年間の資金調達額に与える効果は、プログラム参加前に十分な資金を調達していなかったアーリーステージのスタートアップにのみポジティブであるという仮説を立て、その結果を明らかにした。この結果は、プログラムが特定のステージに特化している可能性があるため、アクセラレーター・プログラムが必ずしもスタートアップのすべてのステージで効果的ではないことを示唆している。本研究は日本におけるアクセラレーター・プログラムを体系的に分析した研究であり、起業エコシステム発展におけるアクセラレーターの経験の役割を明らかにするものであった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 内田大輔; 芦澤美智子; 軽部大	4. 巻 50
2. 論文標題 アクセラレーターによるスタートアップの育成：日本のアクセラレータープログラムに関する実証分析	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本経営学会誌	6. 最初と最後の頁 59-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 芦澤美智子; 張鋭	4. 巻 74
2. 論文標題 シード期スタートアップのピッチコンテスト入賞の効果	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 横浜市立大学論叢 社会科学系列	6. 最初と最後の頁 33-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Mariko Watanabe; Michiko Ashizawa
2. 発表標題 What kind of networking actions and network characteristics are effective for institutional entrepreneurs in emerging entrepreneurial ecosystems?
3. 学会等名 37th EGOS Colloquium 2021（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 芦澤美智子; 張鋭
2. 発表標題 シード期のスタートアップのピッチコンテスト入賞の効果
3. 学会等名 日本ベンチャー学会 第24回全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 芦澤美智子;渡邊万里子
2. 発表標題 ビジネスインキュベーターのガバナンスが入居者企業に及ぼす影響
3. 学会等名 日本ベンチャー学会 第24回全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 芦澤美智子
2. 発表標題 スタートアップ・エコシステム研究のこれまでとこれから
3. 学会等名 Startup Academia Meetup Vol.6 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 芦澤美智子, 渡邊万里子
2. 発表標題 東京スタートアップ・エコシステム形成におけるベンチャーキャピタリストの役割
3. 学会等名 日本ベンチャー学会 第23回全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Michiko Ashizawa, Mariko Watanabe
2. 発表標題 Venture capitalists as institutional entrepreneurs: Role of venture capitalists in the forming of the Tokyo entrepreneurial ecosystem
3. 学会等名 36th EGOS Colloquium, Hamburg 2020 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Mariko Watanabe, Michiko Ashizawa
2. 発表標題 What kind of networking actions and network characteristics are effective for institutional entrepreneurs in emerging entrepreneurial ecosystems?
3. 学会等名 37th EGOS Colloquium, Amsterdam 2021
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関